

2022年度 3月修了 修士論文

トップアスリートの外傷・障害に関する
新聞報道の医学的正確性

Medical Accuracy of Newspaper Articles of Injury
on Top Athletes

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 トップスポーツマネジメントコース

5022A301-1

安間 久芳

Hisayoshi Amma

研究指導教員： 平田 竹男 教授

目次

第1章 背景	1
第1節 背景	1
第2節 新聞とスポーツの歴史	1
第1項 一般新聞社の創刊とスポーツへの進出	1
第2項 スポーツ新聞の創刊	2
第3節 新聞利用の現状	3
第4節 医療と新聞報道	5
第5節 研究動機	7
第6節 先行研究	8
第7節 目的	9
第2章 方法	10
第1節 スポーツ外傷に関する新聞記事の事例分析	10
第1項 対象記事と論点	10
第2項 記事検索方法	10
第3項 調査方法	10
第2節 2022年サッカーワールドカップ大会関連記事検索	10
第1項 対象	10
第2項 記事検索方法	11
第3項 調査方法	11
第3節 インタビュー調査	11
第1項 対象	11
第2項 調査方法	12
第3項 質問項目	12
第4項 分析方法	12
第3章 結果	13
第1節 論点のある新聞記事	13
第1項 大谷選手の手術や外傷・障害記事	13
第2項 バドミントン廣田彩花選手のオリンピック直前に受傷した膝前十字靭帯損傷に関する記事	15
第2節 2022年カタールワールドカップ関連記事	16
第3節 インタビュー調査	19
第1項 インタビュー結果	19
第2項 インタビュー結果まとめ	31

第4章 考察	32
第1節 記事検索結果.....	32
第1項 大リーグ大谷翔平選手の記事について.....	32
第2項 バドミントン廣田選手の記事.....	33
第3項 ワールドカップ関連の記事.....	34
第4項 スポーツ外傷・障害の新聞報道の特徴.....	35
第2節 インタビュー調査結果.....	36
第1項 スポーツ報道の特徴.....	36
第2項 速報性重視.....	36
第3項 記事の推敲.....	37
第4項 記事スペース.....	37
第5項 専門家の必要性.....	37
第3節 記事検索結果とインタビュー調査結果をふまえての問題点.....	38
第1項 選手、チーム側の事情による問題.....	38
第2項 報道機関側の事情による問題.....	38
第3項 改善提案.....	39
第4節 本研究の限界と今後の展望.....	39
第5章 結論	40
謝辞.....	41
参考文献	42

図表目次

表 1	インタビュー対象者の属性.....	12
表 2	大谷選手の「二分膝蓋骨」に関する記事.....	13
表 3	「坐骨結節」の各紙の表記.....	14
表 4	「大腿二頭筋」肉離れの各紙の表記.....	14
表 5	「三角骨」関連の各紙の表記.....	14
表 6	廣田選手の手術に関する記載（GB 紙以外）.....	15
表 7	日本代表候補選手のW杯前の故障.....	16
表 8	海外代表候補選手の W 杯前の故障.....	16
表 9	W杯期間中の故障者.....	17
表 10	論点のある W 杯関連の故障者報道.....	18
表 11	想定する読者層.....	19
表 12	現状の記事で医学的内容は良いと考えているか.....	20
表 13	記事の医学的内容では何が重要か.....	21
表 14	何を参考にして医学的内容の記事を作成しているか.....	22
表 15	医学専門的内容の裏付けはどのようにとるか.....	23
表 16	誰が記事を推敲しているか.....	24
表 17	誤りのない、理解しやすい記事にするために心がけていること.....	25
表 18	記事の医学的内容はスポーツ外傷・障害の知識に役立っていると思うか... 26	
表 19	スポーツ外傷・障害の記事は需要があると思うか.....	27
表 20	一般人向けの健康増進、障害予防の記事は必要と思うか、需要はあるか... 28	
表 21	スポーツ外傷・障害の報道に適したメディアはあると思うか.....	29
表 22	医学的内容を相談できる専門家はもっと必要か、どんな専門家なら有用か、 30	
図 1	スポーツ新聞のネット版に掲載された図.....	1
図 2	フィギュアスケート紀平選手の SNS 3	
図 3	【経年】〔平日〕主なメディアの平均利用時間（全年代）..... 4	
図 4	【経年】〔休日〕主なメディアの平均利用時間（全年代）..... 4	
図 5	各メディアに対する信頼度..... 5	
図 6	健康に関する情報の信用度..... 6	
図 7	健康に関して抱えている不安..... 7	
図 8	前十字靭帯の走行が不正確なイラスト..... 8	
図 9	解剖学的に不正確な足関節周囲のイラスト..... 8	
図 10	ネイマール選手の SNS 17	

第1章 背景

第1節 背景

新聞、インターネットなどで報道されるスポーツ外傷・障害の記事の中には、専門的内容の理解しづらいものや正確性に疑問が残るものも時に存在する（図1）。スポーツ報道でスポーツ選手のケガについて正確で適切な情報が伝わらないことは、その記事を読む人、特に競技関係者に誤解を招く恐れがあり、その誤解は新たな事故発生や誤った知識の流布など、更なる問題の発生につながる恐れがある。また、報道を行う側の信頼性に影響する可能性もある。



図1 スポーツ新聞のネット版に掲載された図
「せんじょうこつ」は誤りで、正しくは「しゅうじょうこつ」

第2節 新聞とスポーツの歴史

日本のスポーツ報道の歴史には、新聞が大きく関わっている。近代的な報道機関は明治時代から発展してきたが、最初は活字媒体である新聞であった。新聞社がスポーツ（主に野球）の大会を主催し、その報道により読者を増やすというビジネスモデルを築きあげた。

第1項 一般新聞社の創刊とスポーツへの進出

一般新聞紙の中でも3大紙と呼ばれる毎日新聞¹⁾、読売新聞²⁾、朝日新聞³⁾の3社について、初期のスポーツとの関連を挙げる。

毎日新聞 1872年2月21日、前身の東京日日新聞として創刊

1918年 全国中等学校フットボール大会（現・全国高校ラグビー大会）開催

1924年 第一回選抜中等学校野球大会（現・選抜高校野球大会）開催

読売新聞 1874年11月2日、読売新聞創刊
1906年 スポーツ面の前身にあたる「運動界」欄を新設
1917年 世界初の駅伝「東海道駅伝徒歩競争」を開催
1931年 米大リーグ野球チームを招待し、日米親善野球を主催
1934年 再度、米大リーグチームを招待
1934年 プロ野球チーム「大日本東京野球倶楽部」（現・読売巨人軍）を
創立

朝日新聞 1879年1月25日、第1号大阪で発行
1915年 第一回全国中等学校優勝野球大会（現・全国高等学校野球選手
権大会）を開催

以上のように、新聞社は現在の高校野球やプロ野球につながるスポーツ活動の支援を行っていた。

第2項 スポーツ新聞の創刊

戦後になって、スポーツや娯楽を中心に扱う、以下のようなスポーツ新聞も創刊されるようになった。

各社のホームページにおける創刊に関する記載を挙げる。

日刊スポーツ 1946年3月6日、日刊スポーツ1号を発行⁴⁾

デイリースポーツ 1948年8月1日、デイリースポーツ創刊⁵⁾

スポーツニッポン 1949年2月1日、スポーツニッポン新聞誕生⁶⁾

報知新聞 1949年12月30日、「郵便報知新聞」からスポーツ紙に転換⁷⁾

サンケイスポーツ 1955年に創刊⁸⁾

スポーツ史学会のシンポジウムの再録⁹⁾によると、玉置は戦後に六大学野球などの復活とスポーツ新聞創刊の関係に触れ、「球場がまた膨れ上がったわけです。」「これだけ球場にいっぱい人が行っているんだから、もっと専門的な、野球をもっと詳しく書いた新聞を出したら売れるのではないか、という発想から昭和21年にスポーツ紙が日本に初めて登場するわけです。」と述べている。また、同シンポジウムで中房は、スポーツに関する活字メディアのうち、「スポーツを専門に扱う新聞や雑誌」の研究状況を「一般紙におけるスポーツ欄」や「各種競技団体が発行する定期刊行物」と比較して、「おそらく日本で一番関心が高い、他の欧米などの研究でも比較的関心が高い」と述べている。

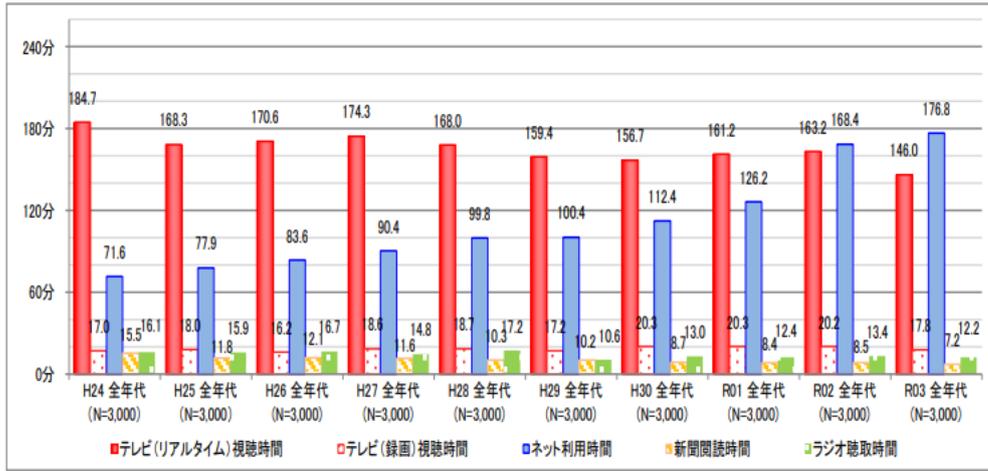


図 3 【経年】〔平日〕主なメディアの平均利用時間（全年代）

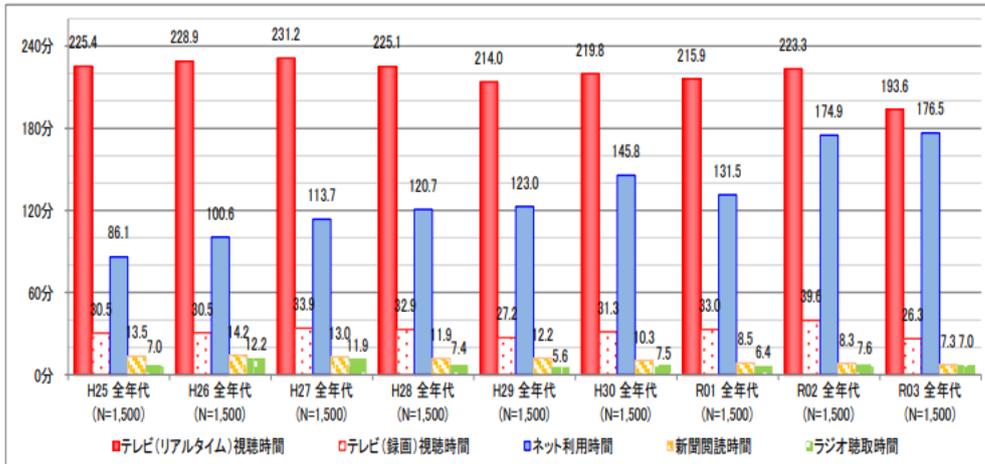


図 4 【経年】〔休日〕主なメディアの平均利用時間（全年代）

一方、総務省によるメディアの信頼度の調査では、20代および40代から60代では新聞が最も高く、10代と30代ではテレビが最も高かった。インターネットの信頼度は10代から60代までの全年代で新聞やテレビより低かった。同じく、総務省の令和3年版「情報通信白書におけるメディアに対する信頼」の調査結果（図5）では、『「信頼できる」については、新聞、テレビ、ラジオの順に高く、マスメディアに対する信頼性が高い。』と記載されている¹³⁾。

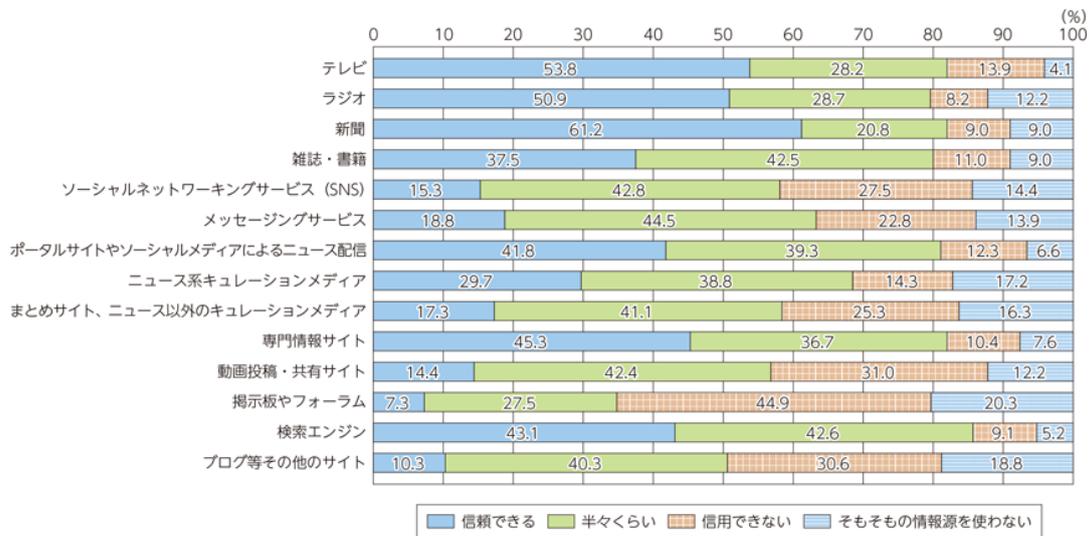


図 5 各メディアに対する信頼度

新聞の購読者は減少しているが、信頼度は最も高いメディアと認識されていることがうかがわれる。新聞に書かれていることは、他のメディアよりも正しいと多くの人が考える可能性がある。上記総務省の調査では一般紙とスポーツ紙の比較はされていないため、両者に対する認識の違いまでは不明である。

第4節 医療と新聞報道

厚生労働省の健康情報の信用度調査では「非常に信用している」単独でも「まあ信用している」を加えても、医師、病院、医学書などの専門家、専門機関、専門書に次いで、新聞の信用度が高かった（図6）¹⁴⁾。つまり、健康情報においても一般報道機関では最も信用されている結果であった。また、Kishi ら¹⁵⁾は医療過誤についての報道の調査を通し、医療関連事件の新聞報道は世論へ大きな影響を与えるとしている。

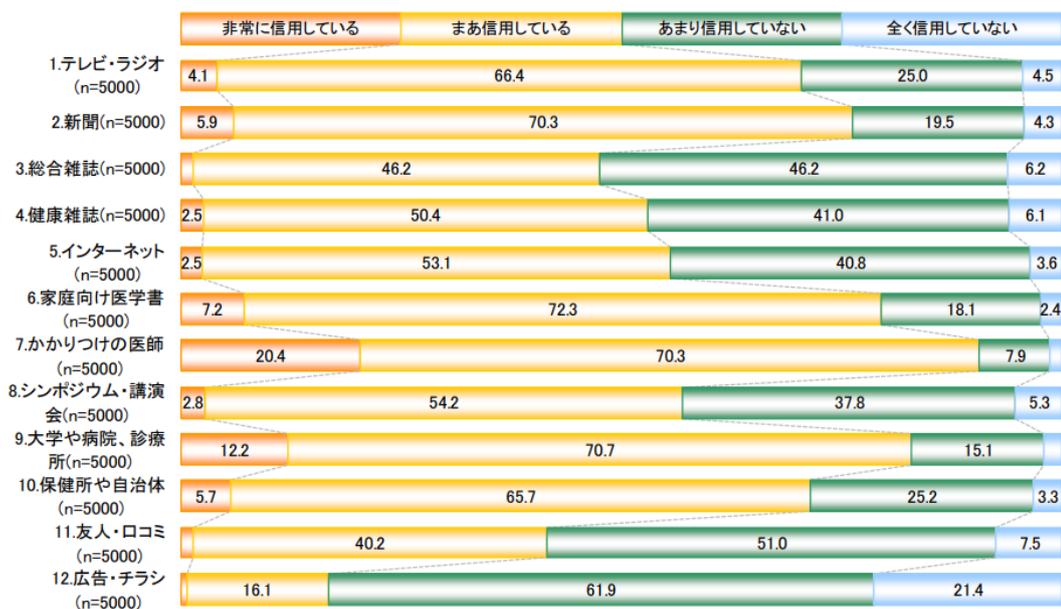


図 6 健康に関する情報の信用度

医学関係の記事の信頼性の向上のため、記事の調査や評価を行う医療従事者やジャーナリストの活動として、「メディアドクター」が存在する。メディアドクターは2004年にオーストラリアで始まり、その後に日本を含む世界各地に広まった。

日本のメディアドクター研究会のホームページ¹⁶⁾を見ると、2007年1月から2022年12月まで95回の活動記録があるが、疾患としてスポーツ医学や整形外科関係で特集されていたものはなく、多くが内科、がん関連である。特に最近の2020年2月から2022年12月までの19回の活動のうち、新型コロナ関連が12回を占め世相を反映した活動となっている。

厚生労働省の「健康に関して抱えている不安」の調査結果(図7)¹⁷⁾でも、スポーツ外傷・障害を挙げられることはなく、その他を含めても整形外科関連疾患への関心は低いことが推測される。後述する先行研究でもがんや内科疾患の報道に関するものはあるが、スポーツ外傷・障害の報道に関する報道の研究は渉猟した限りで見られなかった。

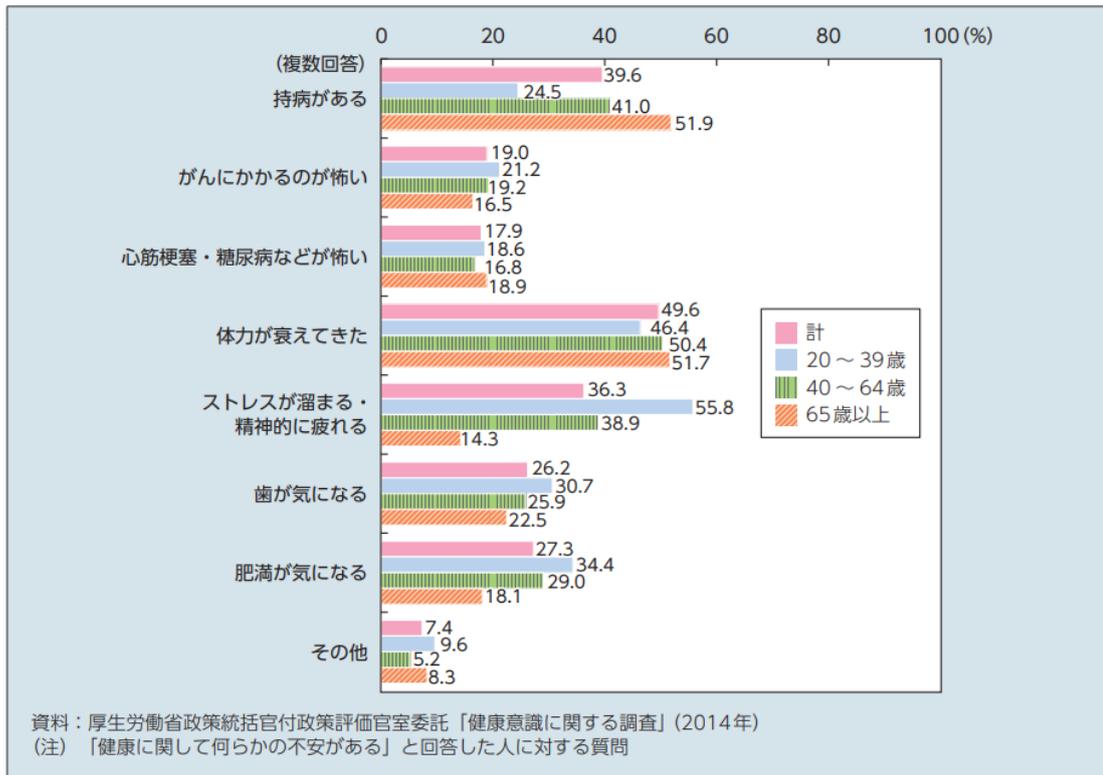


図 7 健康に関して抱えている不安

第 5 節 研究動機

今日では、誰でも情報を発信できるインターネットの普及で、玉石混淆とも言える情報過多の状況となっている。情報の真偽や言語の正確性について、伝統ある新聞社が作成する記事は信頼され手本となり続けるべきと考える。また、生命や寿命に関係の深いがんや内科疾患に読者の関心が高く、新聞がそれらの疾患を多く取り上げるのは必然と思われる。しかし、深刻度は低い可能性はあるが腰痛や膝痛で悩む一般人も多く、その原因に過去も含めたスポーツ活動が関わっている場合も少なくないと考えられる。

これまでの報道においても、記事内の説明イラストで、大腿骨の外側と脛骨を結ぶ前十字靭帯が、逆の大腿骨の内側から脛骨につながっていたり (図 8)、足の骨のイラストが簡易になりすぎたために、不正確な解剖図になっていた (図 9)、足のすね、つまり脛骨 (けいこつ) を頸骨 (けいこつ) と首の骨を示す漢字をもちいた誤字、さらには復帰期間が標準よりずいぶん早い時期で書かれていたり、分かりにくい MRI の画像が用いられたり、軽度の症状にもかかわらず、大げさなコメントが (軽度な) 画像とともに放送されるなど、混乱を招くような情報を目にするようになった。



図 8 前十字靭帯の走行が不正確なイラスト



図 9 解剖学的に不正確な足関節周囲のイラスト

著者がプロサッカーのチームドクターを務めていた時に病名の誤りや、他チームの選手の故障の記事を読んでも状況が不明確な事が少なからずあり、もっと確かな情報が欲しいと思っていた。不明確あるいは不正確な情報が報道されてしまう状況を鑑みて、医学的内容を含む記事の作成過程の現状の把握は肝要だと考える。わかりやすく正確な情報提供を行うことができれば、報道利用者のスポーツ活動や健康知識に有用なものになるばかりでなく、報道機関の信頼性向上にもつながると考えた。

第6節 先行研究

ケガや病気に関する報道についての研究は週刊誌でのがん報道に関するもの¹⁸⁾、記事データベースでの気分障害の報道に関するもの¹⁹⁾、潰瘍性大腸炎の新聞報道に関するもの²⁰⁾、クローン病の報道に関するもの²¹⁾、新型コロナウイルスに関するもの²²⁾、医療フェイクニュースに関するもの²³⁾などがある。また、Kishi らによる新聞における医療事故や医療過誤の報道方針の変化の報告¹⁵⁾や日本の医療漫画の調査結果の報告²⁴⁾も

ある。映画でのスポーツ外傷・障害についての描写の正確性に言及したもの²⁵⁾はあるが、スポーツ外傷・障害に関する報道についての情報は充分にない。

第7節 目的

本研究の目的は、トップアスリートの外傷・障害に関する新聞報道の医学的正確性が損なわれる原因を究明し、改善策を提案することである。

第2章 方法

第1節 スポーツ外傷に関する新聞記事の事例分析

著者が見つけた誤りが含まれている、あるいは誤解を招く可能性があると考えた以下の話題に関する記事について、他社はどのように報じているのか、報じられた内容の分析と比較を行う。

第1項 対象記事と論点

- 1) 大リーグエンゼルス大谷翔平選手の手術や外傷・障害に関する記事。

論点：記事の医学的内容の正確性

- 2) 2021年バドミントン廣田彩花選手のオリンピック直前に受傷した膝前十字靭帯損傷に関する記事

論点：特別な治療方針についての報道内容

第2項 記事検索方法

スポーツ新聞では日刊スポーツ²⁶⁾、スポーツ報知²⁷⁾、スポーツニッポン²⁸⁾、サンケイスポーツ²⁹⁾の4社の各ホームページ、一般新聞では朝日新聞³⁰⁾、毎日新聞³¹⁾、読売新聞³²⁾の記事データベースにおいて選手名をキーワードに使用して第1項で挙げた内容についての記事を検索した。

上記新聞社名の記載順と無関係に、スポーツ新聞4社はSA、SB、SC、SD、一般新聞社3社はGA、GB、GCと表記した。

第3項 調査方法

各論点について7紙の記事を比較し、共通する問題点を抽出した。また、記事の論点以外にも医学用語や文章に問題点があれば抽出した。本論文における記事の校閲には、調査時に最新版である「医学用語辞典（医学書院）」³³⁾、「標準整形外科学第14版（医学書院）」³⁴⁾、「広辞苑第七版（岩波書店）」³⁵⁾を使用した。

第2節 2022年サッカーワールドカップ大会関連記事検索

第1項 対象

スポーツ新聞では日刊スポーツ、スポーツ報知、スポーツニッポン、サンケイスポーツの記事を対象とし、一般新聞では朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の記事を対象とした。

スポーツ新聞では各社ホームページのインターネット記事と新聞紙面から検索し、一般新聞は各社の記事データベースから記事検索を行った。

第2項 記事検索方法

スポーツ新聞ホームページ、一般新聞データベースともにキーワード「ワールドカップ 代表 けが」を使用して、2021年9月1日から2022年12月20日までの記事検索を行った。各単語間に「AND」を挿入して有効な検索ができる場合には使用した。スポーツ新聞では2022年11月23日から同年12月20日までは各社新聞紙面でも検索した。抽出された記事の中から、外傷や障害の記事として調査趣旨に合わないと著者が判断したものは除外した。また、記事の中に、キーワードとは無関係であっても調査に利用できると判断した部分があれば抽出した。新聞紙面ではワールドカップ、サッカーに関連する記事内を検索した。

第3項 調査方法

- 1) 2022年サッカーワールドカップ大会開催前、開催中における選手の外傷、障害について、ワールドカップ試合出場への影響、復帰時期についての報道を中心に調査した。
- 2) 抽出した記事で、医学的内容や用語で誤りが含まれている、あるいは誤解を招く可能性があるとして著者が判断した部分を論点として選択し、他の6紙ではどのように報道されているか比較した。全7紙の記事中で比較した論点以外にも別の問題があると判断した場合は、それも新たに抽出した。

第3節 インタビュー調査

第1項 対象

スポーツ報道や医療の記事作成に関わった経験のあるスポーツ新聞社、一般新聞社、インターネットメディアなどの現役記者や元記者を対象とした。スポーツ報道関係者はスポーツ新聞記者3名、一般新聞スポーツ担当記者2名、インターネットメディア(スポーツ関係)元記者1名の計6名であった。他の2名は健康特集も扱う一般女性誌記者1名とインターネットメディア(医療関係)編集長1名であった(表1)。

表 1 インタビュー対象者の属性

所属	略号	年齢・性別	調査日
一般女性誌記者	M1	40歳代女性	2022年10月8日
一般新聞記者	G1	40歳代男性	2022年10月14日
スポーツ新聞記者	S1	40歳代男性	2022年10月21日
インターネットメディア (スポーツ)元記者	I1	30歳代女性	2022年10月23日
インターネットメディア (医療)編集長	I2	40歳代男性	2022年10月23日
一般新聞記者	G2	40歳代男性	2022年10月28日
スポーツ新聞記者	S2	50歳代女性	2022年11月4日
スポーツ新聞記者	S3	30歳代女性	2022年11月11日

第2項 調査方法

対象者の希望する場所で直接対面にてインタビューを実施した。1人あたり50～70分で聞き取りを行った。

第3項 質問項目

スポーツ報道を主に行っている対象者には、スポーツ選手のケガについての記事作成方法や現状の問題点の聞き取りを行った。医療関係の報道を主に行っている対象者については医療記事作成方法と現状について聞き取りを行った。

第4項 分析方法

以下の観点から各報道機関の現状と問題点を分析した。

- 1) スポーツ報道における医学的内容の現状
- 2) 医学的内容を要する記事の作成方法
- 3) 記事の推敲
- 4) 問題解決方法

第3章 結果

第1節 論点のある新聞記事

第1項 大谷選手の手術や外傷・障害記事

(1) 2019年9月13日に大リーグエンゼルスの大谷翔平選手が左膝二分膝蓋骨の手術を行った。二分膝蓋骨の成因について、全7紙が「先天性」あるいは「先天的」という球団関係者による文言を記事にしていた。各新聞社の記事の一部を抜粋した(表2)。

なお、SD紙は二分膝蓋骨を二部膝蓋骨と誤っていた。

表2 大谷選手の「二分膝蓋骨」に関する記事

対象紙	該当部分に関する記事
SA	エ軍GM「左膝は先天性の痛み」
SB	エブラーGMが電話会見に応じ「先天的なもので...」
SC	先天的に膝蓋骨が分裂して...
SD	左膝手術は「先天性の疾患」エンゼルスGM明かす。手術するのは二部膝蓋骨。
GA	球団によると、今年2月の磁気共鳴画像(MRI)検査で、膝の骨が分裂している先天的な症状が判明。
GB	エブラー・ゼネラルマネージャー(GM)によると... (途中略)故障ではなく「先天性の症状」だという。
GC	大谷の膝蓋骨は先天的に分裂しており... (注 ビリー・エブラー・ゼネラルマネージャーの電話会見として掲載)

(2) 二分膝蓋骨について手術に至った理由についてSD紙は野球解説者の以下の言葉を記事にしていた。

SD紙

(野球解説者)「何回も言っているでしょ。走り込んでないから。それが一番なんですよ」

と苦言を呈した。

(3) 大谷選手の故障歴も紹介されていたが、それに関する各紙記事における不正確な医学用語を以下のように抽出した。

- ・坐骨結節骨端線損傷の「坐骨結節」の表記(表3)
- ・大腿二頭筋肉離れの「大腿二頭筋」の表記(表4)
- ・「三角骨」に関連する表記(表5)

表 3 「坐骨結節」の各紙の表記

対象紙	該当部分に関する記事
SA	座骨関節を損傷していた.
SB	骨折した左座骨が. . .
SC	記事なし.
SD	座骨関節の骨端線を損傷.
GA	座骨結節を痛め. . .
GB	記事なし.
GC	記事なし.

記事にしていた4紙で「坐骨結節」という正しい表記はなかった。

表 4 「大腿二頭筋」肉離れの各紙の表記

対象紙	該当部分に関する表記
SA	太腿裏を肉離れ
SB	太もも裏の肉離れ
SC	太もも裏を肉離れ
SD	太腿二頭筋肉離れ
GA	大腿二頭筋肉離れ
GB	大腿二頭筋肉離れ
GC	大腿二頭筋肉離れ

7紙中2紙で「太腿」あるいは「太腿二頭筋」という文言があった。
一般紙の3紙のみ「大腿二頭筋」と記載。

表 5 「三角骨」関連の各紙の表記

対象紙	該当部分に関する表記
SA	三角骨と骨棘（こっきょく）
SB	三角骨と骨棘の問題
SC	三角骨
SD	三角骨骨棘（こっきょく）
GA	三角骨
GB	三角骨
GC	三角骨

7紙中、1紙で「三角骨骨棘」という言葉が使われ、2紙で「こっきょく」と読み仮名がついていた。

第2項 バドミントン廣田彩花選手のオリンピック直前に受傷した膝前十字 靭帯損傷に関する記事

事実として、2021年6月東京オリンピックのバドミントン日本代表発表後、合宿中に右膝前十字靭帯損傷を受傷し、手術をしない保存的治療でオリンピックの試合に出場したということがあった。

各社の記事検索結果、廣田選手が膝前十字靭帯損傷受傷直後にはこの件についての報道はなかった。

オリンピック終了後の記事に、医師やトレーナーと相談して保存的治療を選択した事の経緯について言及したのは、GBの1紙のみであった。

GB紙の記事の一部

整形外科医とトレーナーにみてもらった。「手術をしたら五輪に出場できないが、足に装具をつければ出られる」と言われた。

表6 廣田選手の手術に関する記載（GB紙以外）

対象紙	「手術」に関する記載
SA	大会後に手術が決まっている大ケガにもかかわらず、4試合コートに立った。
SB	今後については… 膝の手術を受け、治療に専念するという。
SC	大会後に手術を受けることが決まっているほどの状態。
SD	五輪終了後に即手術を行うという広田に…
GA	…手術を回避し、大会後に先延ばしした。
GC	(手術に言及なし。)

手術が必要なケガであることを記載したのは、スポーツ紙4紙中4紙、一般紙3紙中2紙であった。しかし、膝前十字靭帯損傷受傷後に手術を施行しないで早期にスポーツ復帰することの危険性に言及した報道はなかった。

廣田選手が保存療法でオリンピックの試合に出場していることが「奇跡」だと、ダブルパートナーや所属会社社長の述べたコメントを掲載していたのは、スポーツ紙4紙中4紙、一般紙3紙中2紙であった。

第2節 2022年カタールワールドカップ関連記事

2021年7月1日から2022年11月22日までのスポーツ新聞、一般新聞のインターネット記事で、本調査の対象としたのは106記事であった。

その中からワールドカップ（W杯）前の日本代表候補選手の故障（表7）と海外代表候補選手の故障（表8）に関する記事を挙げた。

表7 日本代表候補選手のW杯前の故障

	受傷日	受傷時診断名	受傷時 W杯出場予想	W杯参加
浅野	9月11日	右膝内側靭帯断裂	△	○
板倉	9月12日	右膝内側靭帯部分断裂	△	○
守田	10月26日	左ふくらはぎ違和感	△	○
久保	10月27日	左肩脱臼	○	○
田中	10月29日	右膝靭帯損傷	○	○
中山	11月2日	右アキレス腱負傷	×	×
富安	11月3日	右大腿負傷	△	○
谷口	11月5日	鼻骨骨折	○	○
遠藤	11月8日	脳しんとう	△	○
			○ 言及なし	○参加
			△ 微妙, 不透明	×不参加
			×	不可

表8 海外代表候補選手のW杯前の故障

選手名	所属国名	受傷日	診断名	手術	W杯参加予想	参加
ポグバ	フランス	7月	右膝外側半月損傷	あり	△	×
ロイス	ドイツ	9月	右足首負傷	無し	×	×
アラウホ	ウルグアイ	9月23日	右長内転筋腱損傷	あり	△	○
アルトゥール	ブラジル	10月3日	筋肉系のケガ	あり	×	×
ディ・マリア	アルゼンチン	10月14日	右太もも裏損傷	無し	○	○
ディバラ	アルゼンチン	10月15日	左太もも負傷	無し	△	○
リシャルリソン	ブラジル	10月15日	ふくらはぎ負傷	無し	△	○
ジョタ	ポルトガル	10月16日	ふくらはぎ負傷	無し	×	×
カンテ	フランス	10月19日	ハムストリングスの損傷	あり	×	×
ソン・フンミン	韓国	11月1日	左目のまわりを骨折	あり	○	○
ウェルナー	ドイツ	11月2日	右足首靭帯損傷	無し	×	×
チルウェル	イングランド	11月2日	左太もも裏負傷	無し	×	×
マネ	セネガル	11月8日	右腓骨の損傷	あり	△	×
ベンゼマ	フランス	11月19日	左大腿四頭筋を痛めた	無し	×	×
					○可能,言及なし	○参加
					△微妙, 不透明	×不参加
					×	不可

ワールドカップ期間中の故障者の報道も抽出した。

表 9 W杯期間中の故障者

選手名	所属国名	受傷日	診断名	診断詳細	続報	大会復帰
ケーン	イングランド	11月21日	右足首負傷	×	×	○
L.エルナンデス	フランス	11月22日	前十字靭帯損傷	○	離脱	×
サネ	ドイツ	11月22日	膝のケガ	×	×	○
酒井	日本	11月23日	左大腿裏負傷	△	○	○
富安	日本	11月23日	右大腿裏負傷	△	○	○
ネイマール	ブラジル	11月24日	右足首靭帯損傷	○	○	○
ダニエロ	ブラジル	11月24日	左足首ねんざ	○	×	○
遠藤	日本	11月27日	右膝負傷	×	○	○
アレックス・サンドロ	ブラジル	11月28日	右大腿負傷	×	×	○
ジェズス	ブラジル	12月2日	右膝靭帯損傷	×	離脱	×
				○あり	○あり	○復帰
				△推測可能	×なし	×離脱
				×不明瞭		

故障後の続報は日本人選手では見られたが、海外選手ではネイマール選手のみで、他の選手のケガの回復状況の続報はなかった。

そのネイマール選手については自身の SNS で足の状態が発信され、スポーツ新聞のインターネット記事³⁶⁾でも紹介された(図8)。



図 10 ネイマール選手の SNS

また、ワールドカップ関連の報道記事で正確さや理解しやすさが論点となると思われた記載を抽出した。

表 10 論点のある W 杯関連の故障者報道

選手名	論点のある記載	抽出理由
酒井	左太腿裏の痛み	太腿は医学用語ではなく、腿は常用漢字ではない
富安	右太腿裏の負傷	同上
板倉	(浅野と)同じ右側	右ではなく左
板倉	自然療法	保存療法の誤り
板倉	左膝内側側副じん帯部分断裂	同記事内でじん帯名に相違
浅野	右膝内側じん帯断裂	同上
守田	右ふくらはぎ違和感	右ではなく左
田中碧	右膝じん帯損傷	W杯直前だが診断名、参加可否の情報不足
中山	アキレス腱を負傷して手術	手術になった診断名不詳
酒井	中足骨骨挫傷の診断 手術	骨挫傷で手術は例外的
アラウホ	右足長内転筋	足は足首から下の部分に使うべき言葉
アラウホ	右足大内転筋	同上、および大内転筋は長内転筋の誤りの可能性
ベンゼマ	右足大腿四頭筋	足は足首から下の部分に使うべき言葉

医学用語の誤り 6 件、不明瞭あるいは不統一な診断名が 4 件、患側の左右の誤りが 2 件あった。

第3節 インタビュー調査

第1項 インタビュー結果

質問1 想定する読者層

インタビューの結果について以下に各対象者のコメントの抜粋を示す（表11）

表 11 想定する読者層

対象者	該当部分に関する解答
M1	20歳代から50歳代の働く女性を対象にしています。
G1	子供から老人まで、活字が読める人、全ての人が大前提です。
S1	一般家庭の人ですね。宅配8割、駅売り2割と宅配が多いので。
I1	20から40歳代の社会人男性でスポーツ好きを想定してます。
I2	医師、看護師、薬剤師など医療関係者の方です。
G2	小学生から老人までです。スポーツ欄は多少スポーツを知っている人を想定しています。
S2	紙媒体は50代以上です。ネット記事は10から40歳代で、仕事はネット記事を優先してやっています。スポーツは男性向け、芸能は女性向けに作っています。
S3	60～70歳代の男性で、当社の読者の特徴は競馬好き、スポーツ好きの方が多いです。

質問1 まとめ

年齢層では一般紙は2名とも子供から老人までを想定していた。スポーツ紙の紙媒体は1名が家庭向け、1名が50歳代以上、1名が60～70歳代と高めの想定であった。スポーツ紙のネット記事やスポーツインターネットメディアは40歳代以下のスポーツ好きを想定していた。一般女性誌では20～50歳代の働く女性、医療インターネットメディアは医療従事者を想定していた。

質問2 現状の記事で医学的内容は良いと考えているか (表 12)。

表 12 現状の記事で医学的内容は良いと考えているか

対象者	該当部分に関する解答
M1	量は丁度良いと思う時が多いですが、もう少し多く書きたい時もあります。わかりやすさは丁度良いと思ってます。文字数が多いと読まれないため図をもっと入れたいとも思います。
G1	仕方ないと思ってます。書くスペースも締め切り時間も限られているので。良いとは思ってません。人の生死の関わる事は絶対間違えられません。僕たちが取材するのは選手で、医師ではありませんので100%正確とは思えません。だから丸く書きます。我々は詳しくなくても、不正確はダメなんです。
S1	もっと詳しい方が良いです。速報性を重視しているため、チーム広報リリースをすぐに報道しなければならない事が多いです。時間がなく雑になりやすい事は感じています。
I1	時間的に制限があり、相談できる専門家も知らなかったため現状のように記載するしかなかったです。ネット記事は新聞よりも早く報道する速報性が重要なんです。ネット記事は媒体の容量制限がない利点はあるが、詳しくても長文は読まれないです。ながら読みですね。図は載せたいが短時間では限界があります。
I2	ネット媒体なのでスペースに制限がなく良いと思っています。図や動画も掲載できるのが利点ですね。医療従事者相手なので他科の医師がわかるレベルを基準にして記事を作ってます。
G2	充分ではありませんが、紙面の限りがあり仕方ないと思ってます。
S2	詳しくは足りません。でも、締め切りがあつて原稿を早くあげなければいけないんです。一般論で書ければ良いです。わかりやすさは私がわかれば読者もわかると思ってます。図をみても読者はわからないでしょう。
S3	問題があると思います。間違っている事に気づいていないのはダメだと思います。絵もあった方がわかりやすいと思いますが、注目されている競技じゃないとスペースがもらえません。ネット記事よりも新聞は信用が大事だと思います。

質問2 まとめ

スポーツ紙3名、インターネットスポーツメディア1名の計4名は現状の医学的内容が不十分だと答えた。また、一般紙2名も不十分だと感じていたが、ともに紙面の都合で仕方ないと回答した。一般女性誌や医療インターネットメディアは充分に書けている事が多いという答えだった。

質問 3 記事の医学的内容では診断、治療、復帰時期、予防のうち何が重要か（表 13）。

表 13 記事の医学的内容では何が重要か

対象者	該当部分に関する解答
M1	女性の健康問題が主になっています。生理痛や更年期障害などの健康管理関係ですね。予防、対処法や医師への受診の仕方は需要があると思います。
G1	診断、治療、復帰時期など予防以外全部ですね。特に手術方法。原因もわかれば良いですね。
S1	復帰までの期間が大事です。今期中に復帰できるかとか。
I1	患部がどこか、深刻度はどうかですね。正確性は重要です。
I2	ケガの報道記事は扱ってません。スポーツ外傷はほぼ扱わないです。
G2	全部ですが、特に復帰までの時間やどの試合に間に合うのかというところでは。
S2	全てです。
S3	いつ戻って来られるのか伝えないと行けないと思ってます。全治何か月とか、今期絶望とか。

質問 3 まとめ

スポーツ関係記者 6 名のうち、3 名は復帰時期が重要と強調し、他の 3 名は復帰時期、深刻度なども含めて全般的に重要とした。他の 2 名は記事でスポーツ外傷の扱いがほとんどなかった。

質問 4 何を参考にして医学的内容の記事を作成しているか (表 14)。

表 14 何を参考にして医学的内容の記事を作成しているか

対象者	該当部分に関する解答
M1	編集者がまず本やネットを調べます。その後、著書を出版している医師に取材に行く事が多いです。一般向けに著書を出しているとわかりやすいので。よく取材に行く産婦人科医はいますが、初対面の医師のところへフリーの医療専門ライターを伴って取材に行くこともあります。
G1	チーム広報の発表や過去の記事を参考にします。他社の記者と確認し合うこともあります。
S1	家庭の医学 (本) や厚労省のホームページは見ます。
I1	チームが発表した場合はその通りに書くことが基本です。学会や大学病院などのウェブサイトをも2つ以上見て確認します。時間的、人脈的に難しいところがあります。
I2	医学会に参加して発表を聞きます。直接、発表者に聞くこともあります。
G2	取材に行き、トレーナーに聞いたりします。過去の記事、ネットも見ます。
S2	インターネットでみたり、医療関係の友人に聞いたりするくらいですね。
S3	だいたい広報発表のまま記事にします。詳しい記事を書くためにデスクから指示があって会社とつながりのある医師に電話したりします。会社の許可を取って、他の専門家に聞くこともあります。

質問 4 まとめ

8名中、医療従事者向けインターネットメディアと一般女性誌の2名は積極的に専門家に取材していた。スポーツ報道関係の6名のうち3名はチーム広報の発表をほぼそのまま記事にするとのことであった。そのうちスポーツ新聞記者の1名がデスクの指示があれば医師に電話するとのことだった。他の3名はインターネット情報を参考にしてはいたが、それに加えてトレーナーに話を聞く、あるいは本を読むと回答した記者が各1名いた。

質問5 医学専門的な内容の裏付けはどのようにとるか（表15）。

表15 医学専門的内容の裏付けはどのようにとるか

対象者	該当部分に関する解答
M1	熱心に協力してくれる医師から記事完成前にいろいろ訂正されることもあります。逆に完成記事に興味がなく「私の本を読んで記事書いておいて。」と言うような医師もいます。
G1	インターネットやSNSで専門医を調べて電話することはあります。
S1	懇意の医師に聞いたりします。
I1	前の質問と同じで、本当は専門家に確認をとりたいところですが、時間的、人脈的に難しいです。
I2	専門家2、3名にインタビューします。
G2	特になしです。
S2	確認とってません。
S3	ネットで病名を確認したりしますが、検索で出ないと広報に確認とります。

質問5 まとめ

医師など専門家に聞くための人脈があるのは4名。そのうち2名はスポーツ報道関係者ではなかった。特に人脈のない4名のうち3名は特に確認を取らず、1名はネットやチーム広報に確認を取るとのことだった。

質問6 誰が記事を推敲しているか (表16)。

表16 誰が記事を推敲しているか

対象者	該当部分に関する解答
M1	ライターで記者の順で、その後は編集長や著者校正があって校正にまわります。
G1	デスクや校閲部が見て整理部、編集長です。
S1	デスクから整理部で校閲、局次長の順です。
I1	編集部で最低2名が推敲します。
I2	記者が書いてデスク、編集長が見ます。
G2	デスク、整理部ですが、誤字や読みやすいかは見ますが、専門的な内容の推敲ではないです。
S2	記者でデスクで校閲で局次長で局長です。医学的内容はチェックする人は0 (ゼロ) です。
S3	記者の上がデスク、部次長で部長、その上に局長がいます。でも、字が間違えていないかチェックする仕事なんです。有名選手なんかでスペースが大きく取れた場合は、デスクから誰々に電話して取材してとか指示が出る時があります。

質問6 まとめ

全員が記事は2名以上の担当者に推敲されるとのことだった。そのうち3名が、推敲で行われるのは医学的内容ではなく単語や文法の間違いを指摘する事にとどまると強調した。

質問7 誤りのない、理解しやすい記事にするために心がけていることはありますか（表17）。

表 17 誤りのない、理解しやすい記事にするために心がけていること

対象者	該当部分に関する解答
M1	本、ネットで確認したり、医師に聞きます。雑誌はテーマが決まってから編集者自身で調べて予備知識をつけてから取材に行くので、記事を作る時間があります。その後に記事の校正もあります。
G1	多くの色々な人に聞きます。他社の記者とも確認し合います。内容が抽象化されますが、不正確な事を書かないように詳しさを捨てて丸く書くこととなります。例えばお医者さんからすれば10cmのものを「8cm以下にする」ことが大事でも、「小さくする」とか丸く書きます。
S1	選手からよく話を聞いたり、普段から本を読むことですかね。弟が理学療法士なので話を聞くこともあります。
I1	裏取りは必ずするようにしています。専門的な言葉は必要最小限にして協力わかりやすい言葉を使うようにしていました。
I2	個人で勉強してます。
G2	わかりやすい記事にする事は心がけています。
S2	口頭で選手やトレーナーに聞くこともあります。記事は見せちゃいけないんです。
S3	名前、年齢は特に間違えられないです。病名などの後にひらがなをいれたり、あえて詳しく診断名を書かずに「膝のケガ」とか逃げます。

質問7 まとめ

8名とも何らかの努力をしているとのことであった。一般紙1名とスポーツ紙1名の計2名は、間違いのない記事にするために詳しさを捨てて簡単に書く事もあると述べた。

質問8 記事の医学的内容はスポーツ外傷・障害の知識に役立っていると思うか(表18)。

表 18 記事の医学的内容はスポーツ外傷・障害の知識に役立っていると思うか

対象者	該当部分に関する解答
M1	思います。ダイエット、ヨガ、3分間筋トレなんかの隙間時間に家で簡単にできるものが好まれてます。
G1	スポーツ記事が利用されているとは思ってません。
S1	特にトレーニング方法や栄養摂取については参考にされていると思います。
I1	裏取りは必ずするようにしています。専門的な言葉は必要最小限にして極力わかりやすい言葉を使うようにしていました。
I2	そのような記事がないです。
G2	一般紙の報道では実感はないですね。ある選手の特集記事なんかにはあると思いますが。
S2	参考にされてます。
S3	思わないです。

質問8 まとめ

対象となる記事がない医療メディア1名を除いた7名では、3名が参考にされると答え、2名がテーマ、特集により参考にされると答えた。2名が参考にされていないと述べた。

質問9 スポーツ外傷・障害の記事は需要があると思うか（表19）。

表19 スポーツ外傷・障害の記事は需要があると思うか

対象者	該当部分に関する解答
M1	外傷のようなものより、ダイエットやヨガのような手軽にできる健康増進法などの記事が好まれます。個人的にはウォーキングやジョグなどをとりあげたいんですが、まだできてないです。
G1	一定数の需要はあると思いますが、詳しくすぎるものは求められていないと思います。有名選手とか特定の選手のケガなら需要があると思います。
S1	需要はあります。記事作成は大変なんです。
I1	ネット記事にはないですね。豆知識程度。能動的に見られる媒体ではなく、流し読みされる媒体なんです。病院で先生に聞きたいと思う人が多いのではと思います。ただ、「燃え尽き症候群」とかのメンタル面では病院に頼る発想がなくて、ネット記事で気づくというパターンの方が多くはないか考えると、きちんとした記事の価値があると思います。
I2	需要は少ないですね。エッセイ的なものにはありそうですが。
G2	需要はあるかも知れないとは思いますが。
S2	思ってます。治療にも手術とか保存とかあるじゃないですか。そういうのを伝えられたらいいですね。
S3	避けて通れないものなんですよ。必要なものだと思ってます。報じる責任はあると思ってます。

質問9 まとめ

スポーツ紙の3名と女性誌の計4名は需要あると答え、一般紙2名は一定数ある、あるかもしれないとの答えだった。インターネットメディアの2名はない、少ないとの答えだった。

質問 10 一般人向けの健康増進、障害予防の記事は必要と思うか。需要はあるか
(表 20)。

表 20 一般人向けの健康増進、障害予防の記事は必要と思うか、需要はあるか

対象者	該当部分に関する解答
M1	あると思います。伸びる可能性はあると思います。
G1	一定数あると思います。
S1	必要だと思います。需要もあると思います。
I1	ネットでもテーマを決めて時間をかけて取材した健康増進に関する記事なんかには需要ありますが、いわゆる報道記事にはそのような需要はないと思います。
I2	一般人向けに記事を作ってません。
G2	いかにアスリートが苦勞、努力したかの記事を通せば需要があるのではと思います。
S2	スポーツ紙では選手と絡めた原稿でないとダメなんです。
S3	からだの健康に関する記事はあった方が良くと思います。ネットよりも新聞読者の方が年配なので需要があると思います。

質問 10 まとめ

一般人向けの記事を作っていない 1 名を除いた 7 名のうち、5 名が健康に関する記事に肯定的で、2 名がスポーツ報道の役割としては否定的であった。

質問 11 スポーツ外傷・障害の報道に適したメディアはあると思うか（表 21）。

表 21 スポーツ外傷・障害の報道に適したメディアはあると思うか

対象者	該当部分に関する解答
M1	信頼性はネット記事は疑問があります。広告に翻弄されている事もあると思います。信頼性で言えば大手一般新聞が一番良い感じです。
G1	ないです。医師など専門家が会員制ネット記事を自ら発信すれば良いのでは。
S1	Web記事は伸びると思いますが、紙媒体もなくなならないんじゃないかと思ってます。
I1	基本的にはWebです。ただ、中高生が偽情報に触れる機会を減らすとかは必要だと思います。
I2	紙媒体の需要はなくならないと思います。動画や音声についてはネットの大きな長所ですね。
G2	限定する必要はないと思います。
S2	ネットが一番かとも思いますが、消えちゃうじゃないですか。だから、ネットをもつ新聞などの媒体ですかね。信用されるのは昔からの媒体だと思います。
S3	できるだけ速いメディアが良いとは思いますが拘る必要はないと思います。速報は大事ですが、新聞は正確性も大事だと思ってます。

質問 11 まとめ

信頼性、正確性から新聞を上げた記者が2名いた。特に適したメディアはないと2名が回答したがいずれも一般新聞記者だった。4名がインターネット記事を挙げたが、そのうち2名が紙媒体もなくなならないと予想した。8名中、3名がインターネット記事の正確性への疑問を挙げた。

質問 12 医学的内容を相談できる専門家はもっと必要か。どんな専門家なら有用か (表 22)。

表 22 医学的内容を相談できる専門家はもっと必要か、どんな専門家なら有用か

対象者	該当部分に関する解答
M1	もっと必要ですね。相談しやすい医師がいいです。大学教授や有名病院院長などの肩書きは意識したことがないですね。一般人向けに著書を出版している医師は、一般人に伝え慣れているため候補に挙がります。記事に色々口出ししてくる医師も困るんですが、ほったらかしの医師も信頼は低いです。
G1	もっと必要ですね。相談しやすい医師が良いです。ただ、完成記事の内容や報酬でうまくいかないこともあるんです。大学教授や有名病院院長などの肩書きは不要です。
S1	必要です。連絡、相談しやすい専門家が必要だと思ってます。権威なんかは不要です。
I1	需要あります。専門別に電話で問い合わせることができれば大変良いです。専門家の問題点としては、長い時間説明したがつたり、できた記事をチェックしたがるとか色々あります。
I2	専門媒体なので医学全般では相談できる専門家は結構います。スポーツ整形なんかの記事は少ないため、相談できる医師は少ないんですが。
G2	需要はありますが、すでに記者各個人でつながりは結構あります。
S2	いつでもどこでも相談できる医師がほしいですね。いろんな専門家がいればいいですね。医師であればいいです。病院の名前が有名だとなお良いですね。
S3	お願いしたいですね。電話でやりとりできる専門家がいると助かります。大学教授などの権威はどうでもいいですね。

質問 12 のまとめ

もっと必要との回答が 6 名、すでに相談できる専門家がいると答えたのは医療メディア 1 名、一般紙 1 名であった。必要と答えた 6 名全員が連絡を取りやすい、あるいは相談しやすい専門家が良いと回答した。

第2項 インタビュー結果まとめ

1) スポーツ報道における医学的内容の現状について

現状の記事の医学的内容について、スポーツ報道にたずさわるスポーツ新聞、一般新聞、インターネットメディアの6人の記者全員が良いとは思っていなかった。スポーツ報道以外の2名は時間制限が少なく良い記事作りができていると答えた。一般新聞記者2名は紙面や時間に限りがあるため詳しい記事が書けないのは仕方がないとの回答であった。スポーツ新聞記者の3名は同様に速報性のため記事作成の限界がある中で、より詳しい記事を作りたいと考えていた。インターネットメディアの場合は、新聞よりも早く利用者に記事を届けるところに存在価値があるため、内容の詳しきよりも試合結果などの速報性を重視していた。

2) 医学的内容を要する記事の作成方法について

医学的内容について正確な記事を作成するための手段としては、取材時間を充分に取れる一般女性誌および医療インターネットメディアでは専門家に取材できていた。対照的にスポーツ報道に携わる記者のうち半数はまずチームの広報をそのまま記事にするとのことであった。また広報発表に何か加える場合でもインターネットや本で調べるなどであった。一般新聞記者1名、スポーツ新聞記者1名の2名は不正確な内容を避けるために、内容を詳しく書かずに浅く書くことを選ぶとのことであった。

3) 記事推敲について

記者が作成した記事については、どの媒体でも上司のデスクや整理部が推敲する仕組みはできていた。しかし、医療メディアを除いては、誤字や脱字など日本語の問題点を拾い上げる機能しかなく、医学用語や医学的内容の正確性までは確認されていないのが現状だった。そのため、医学的内容については記者が取材して書いた時点でほぼ決定していた。ただ、スポーツ紙記者1名はデスクから医師などの専門家への更に詳しい取材を要求されることもあるとのことだった。

4) 問題解決方法について

医学的内容を相談できる専門家についてはもっと必要であるという意見が8名中6名だった。6名とも電話など連絡がとりやすくて相談しやすい医師などの専門家がいれば助かるという回答であった。医師の中でも大学教授などの権威付けが必要と答えた記者はいなかった。医師と連絡を取り合った記者が困った経験として、「記事に色々口出ししてくる医師も困るんですが、ほったらかしの医師も信頼は低いです。」「完成記事の内容や報酬でうまくいかないこともあるんです。」「長い時間説明したがったり、できた記事をチェックしたがるとか色々あります。」などの意見があった。

第4章 考察

第1節 記事検索結果

第1項 大リーグ大谷翔平選手の記事について

1) 2019年に大谷選手が手術した膝の診断名は二分膝蓋骨であった。二分膝蓋骨とは分裂膝蓋骨のうち、骨片が1つのものを言う。多くは症状がないが疼痛を訴えるものを、有痛性分裂膝蓋骨と呼ぶ。その病因について、日本で頻用されている整形外科教科書の1つである「標準整形外科学」³⁴⁾では「病因としては、副骨端核の残存、外傷、骨軟骨炎などが挙げられる。」「膝蓋骨に骨化核が2つ以上存在し、成長後もそのまま癒合しないことがある。」との記載がある。つまり、成長期に骨化核が癒合しないと本疾患になる可能性があるということである。また同書には、「スポーツ活動によって疼痛が生じた場合に有痛性分裂膝蓋骨という。」との記載もあり、運動負荷が痛みの原因になることが示されている。

スポーツ紙4紙と一般紙3紙は本疾患についてエンゼルスゼネラルマネージャーの言葉としながら、「先天性」の疾患と記載した。広辞苑第七版³⁵⁾では「先天」について「生まれつき身に備わっていること」とされている。よって、出生時に発生することがない本疾患は先天性とは言えない。

大谷翔平選手はアメリカで活動している選手のため、日本の報道機関は取材源が限られている。二分膝蓋骨が「先天性」の疾患とする記事はチームのゼネラルマネージャーに電話取材して作成した記事である。おそらくゼネラルマネージャーは外傷により発生した疾患ではないと言いたかったのではないかと推察される。しかし、医学的内容については専門家の意見ではないため不正確な可能性を考えるべきである。新聞各社が同じ情報源に頼らざるを得ない場合は横並びの内容になって同じ間違いに陥りやすい。この事例では新聞記事に信頼をおく読者が、自身の子供等で幼少時から同疾患を心配して不要な診察や放射線被曝のあるX線検査を希望するなどの誤解につながりかねない。誤った内容の記事が活字になることにより、社会に影響を与える可能性を考慮すべきと思われる。

2) 前述のように二分膝蓋骨の痛みはスポーツ活動などの負荷で起こるため、野球解説者の「走り込んでないから。」と言う発言は誤りと言える。むしろ、走り込みにより発症しうる疾患である。このような不適切な内容が活字にされ新聞記事になると、痛みがあるのに、さらに走り込んで悪化を招くなどの不利益を被る読者が出る可能性がある。野球解説者は野球の専門家であり医学の専門家ではない。記事作成者は解説者の話した内容をそのまま記事にするのではなく、真偽を検討して報道利用者に正しい知識を示す使命もあると思われる。

3) 大谷選手が日本で選手生活を送っていた時期の大きな外傷・障害として、「坐骨結節」、「大腿二頭筋」、「三角骨」の問題が報道されていたが、これら固有名詞である単語の誤りが各紙の記事で散見された。

「坐骨結節」に関する記事は4紙で見られたが、4紙ともに「坐骨」を「座骨」とする誤りが見られた。また、「座骨関節」あるいは「坐骨関節」という記載にしても、そのような関節はない。同じような誤りが2紙以上で見られる場合は、取材現場等で記者同士が確認し合っただけで間違った可能性もある。

「大腿」の「腿」は常用漢字表³⁷⁾にはない漢字である。文化庁の常用漢字表は、新聞も含めて漢字使用の目安を示すものである。ただし、各種専門分野や個人個人の表記にまで及ぼそうとするものではないとされている。「大腿二頭筋(だいたいにとうきん)」は解剖学の固有名詞であるため問題ないが、「太腿二頭筋」は誤りである。「大腿」を一般にわかりやすく「太もも」と表記する新聞もあった。「太腿(ふともも)」の表記は「医学用語辞典」や「標準整形外科学」などの医学書にはない。「ふともも」の漢字変換は広辞苑第7版では「太股」となっており「太腿」はない。旺文社国語辞典第十一版や小学館新選国語辞典第十版でも同様である。三省堂新明解国語辞典第八版やGakken 常用国語辞典改訂第五版では常用漢字表外として「太腿」も記載されているが、常用漢字ではない字を使用する事から新聞では使用しない方がよい単語と思われる。「三角骨」は足関節後方の小骨で、医学的に「三角骨骨棘」と表現することはない。「三角骨と骨棘」と書いた記事もあるが、おそらく「三角骨」が大きな問題で「骨棘」は書かなくても良いものであると推測される。また、「骨棘」の振り仮名が2紙で付けられ、ともに「こつきょく」となっていたが「こつきょく」が正しい。

大谷選手のように人気選手で読者の関心が高ければ、記事の紙面が大きく割り当てられる。そのため、記者は一つの話でも詳しく取材し、紙面を埋めるために多くの文章を書く必要が出てくる。そのため、専門的な内容まで書くことを要求され、誤りが増加することになると推測される。

国立国語研究所の田中ら³⁸⁾は現代日本社会に存在する難解用語の一つとして「病院における医療関連用語」を挙げて改善するための活動を行っている。その中の提案として、「医療の専門家がその知見や経験を生かして、他の多くの語にも類推して活用していくことが望まれるものである。」とある。つまり、医師などが知識や経験の元に理解しやすい言葉に置き換えて欲しいと言うことだろうか。専門家以外がそれを行うのは容易ではないという意味にも取れるかもしれない。読売新聞科学記者の保坂³⁹⁾は「科学取材では、どうしても(原文ママ)専門用語が多くなるので、経験のない記者はそれで尻込みしてしまうようだ。」とも述べている。

第2項 バドミントン廣田選手の記事

オリンピック直前の膝前十字靭帯損傷を本人、医師やトレーナーなどの医療関係者の努力によって試合出場を可能にした。保存的治療でオリンピックに出場したことに異論はない。この努力には本当に頭が下がる思いであり、当初の目標である金メダルには届かなかったものの讃えられるべき結果であったと考える。

ただし、これは選手人生において最大の大会で、しかも4年に1度しか開催されないオリンピックのための特例だということも読者にわかるように記事を作成すれば、さらに良かったと思われる。大会後に手術するという事と、試合に出られたことが「奇跡」だと言うことを記事にすることにより、保存的治療で試合に出ることは普通のことではないと伝わる可能性はある。しかし、逆に前十字靭帯損傷でも、努力すれば手術しなくても短期間で試合に出られるという読者の解釈になる危険もあり得る。廣田選手の場合は靭帯損傷時に深刻な半月損傷を合併していなかった事が手術せずに試合に出られた理由の一つである。しかし、前十字靭帯損傷で手術せず保存的治療のみで早期に復帰した場合は膝の不安定性が残存するため、復帰できたとしても膝くずれなどにより半月損傷などを合併することがある。「標準整形外科学」³⁴⁾にも、「前十字靭帯損傷後に未治療のままスポーツ復帰した場合は、半月損傷や関節軟骨損傷をきたす危険性が高くなる。」と記載されている。特に成長期の選手では啓蒙が必要と考える。この件において、苦悩の末に保存的治療を選択してオリンピック出場を目指した事について言及した記事が載ったのは一般紙1紙のみであった。スポーツ選手であれば前十字靭帯損傷は手術して約8カ月あるいはそれ以上かけて復帰するのが通常である事が啓蒙されれば社会的には有用だったと思われる。第1項で述べた大谷選手の記事にも言えることだが、新聞の情報は他の一般メディアよりも信用度が高いため、より正確に状況を伝える必要があると思われた。

第3項 ワールドカップ関連の記事

今回のワールドカップは通常の開催時期と異なり、カタールの暑熱を避けて11月開催となった。そのため、各国のサッカーリーグ戦の中断や終了後、約1週間で大会が行われることになり、故障者も多く発生した。

日本代表候補選手も大会前の故障により9名の報道が検索された。そのうち1名が受傷後早期に手術を受けてワールドカップ出場を断念したが、当初の報道では出場可能か不透明だった5名は全員が出場を果たしている。結果的には復帰できる故障だったが、関心の高い大会前だったために通常よりも報道で大きく取り上げられた側面は否定できない。各国リーグ戦がワールドカップ直前まで続いていたことで、治療に十分な時間が取れない事も復帰予想の妨げになったと思われる。

また、大会期間中の故障については情報戦の最中であると思われ、診断名や重症度が不明確な報道がより多くなる傾向があると考えた。ケガの状態が隠される傾向の中、ネイマールは自身のSNSで足の状況写真を大会中に発信していた。これは、新聞やテレビなどの報道機関に公開しなければ、自分だけが独占的に発信できるものであり、真剣な大会中にも人気商売の一面を感じた。SNSでの個人情報発信は、競技生活への影響よりも、ファンサービスや人気、収益面が優ると判断されれば、今後も行われると考える。穿った見方をすれば、SNSは報道機関の校閲を受けないため、不正確な医学的内容の記

事も増加する危険性があるほか、今後は他チームや他者に誤情報を与えるために SNS が利用される可能性も否定できないと思われた。

ワールドカップサッカー関連記事中の論点を個々に挙げてみる。前述の「太腿」もみられたほか、「足」を下肢全体の表現に使用されていた。広辞苑³⁵⁾では「(特に人間の)足首から下の部分。」と記載されており、股関節周囲や大腿部の大腿四頭筋や長内転筋には使用しない方が良いと思われた。また、患側の左右間違いは医学的知識とは関係なく避けるべきである。治療法で手術をしないで治療する方法を「保存療法」あるいは「保存的治療」と言うが「自然療法」とは言わない。「内側側副じん帯」、「内側じん帯」と二通りの表現が同じ文中にみられたが、これらは同一のものであるため、表現を統一しないと、別物と解釈される恐れがある。アキレス腱の負傷は表現が不明瞭であるが、手術した事実を鑑みると断裂が疑われる。酒井選手の記事にある、骨挫傷での手術は例外的であり、他の情報をみると疲労骨折であることがわかる。田中碧選手の膝じん帯損傷はワールドカップ直前で出場困難な印象を受けかねない情報である。詳細が不明瞭な情報であるが、後日一部の報道で関節包損傷とされた。このあたりの内容は、専門家でない記事作成が容易ではないと思われる。

第4項 スポーツ外傷・障害の新聞報道の特徴

現代人の傷病への関心が高いものの代表は「がん」であるが、永田¹⁸⁾は「週刊誌のがん報道、その影響と実態」の中で、がん報道の正確性などの実態を報告している。それらがんについての記事内容では「がん治療・診断」が最多 32.8%であったとされている。この報告では特にがんの治療法について、効果の確証が得られていない保険適用外治療に関する記事が多いことを取り上げている。これは、週刊誌の読者層が「がん」について自分事として関心を持っており、読者自身の参考にする可能性が高いことを想定した報告と思われる。週刊誌や新聞の購読者の年齢層が高くなってきている今日では、「スポーツ外傷・障害」よりも「がん」に関心が向くのは必然かもしれない。

スポーツ外傷・障害の新聞報道について今回取り上げた記事は、主に選手の受傷状況や今後の復帰に関する内容で、読者自身の参考にする目的の週刊誌のがん報道とは異なる。新聞と週刊誌で報道の役割が異なる事は別としても、「スポーツ外傷・障害」と「がん」とでは関心の持たれ方の相違が大きいと思われる。「がん」は生死に関わる病気で、「スポーツ外傷・障害」は寿命には直接関係ない、さらに言えば日常生活に大きく関わらない疾患程度の認識を持たれている可能性もある。自分や周囲の人がスポーツとの関わりが少なければ、新聞読者はスポーツ外傷・障害について自分事と考えることは少なく、スポーツ観戦などの娯楽情報の一部として関心を持っている程度かも知れない。そのため、スポーツ外傷・障害の治療方法などの医学的な内容よりも、選手の復帰時期や選手の苦悩などの点を重視した記事作りになるものと思われる。しかし、本格的な競技スポーツに限らず中高年でも健康維持運動等は今後も重視されるものと予想され、スポ

一ツ外傷・障害についての正確な知識は軽視すべきではないと考える。

読売新聞科学部記者の保坂⁴⁰⁾は新聞の原則として「人を描け」という言葉を取り上げており、『新聞では科学者の生き様を書くので、そのぶん科学そのものの記事分量は削ります。だから、科学自体については他のメディアで読んでください。本もたくさん出ていますから。』と言っていいのだろうか。」と問題提議している。これは、スポーツ報道でも選手のケガの詳細よりも選手の生き様を書くという事で当てはまるのではないだろうか。一方、毎日新聞の滝口⁴¹⁾はスポーツ・ジャーナリズムの機能として、「記録性」、「娯楽性」、「論評性」のほかに、「指導や教育の機能としての『啓蒙性』も加えていい。」としている。この「啓蒙性」の教育機能の一部として、選手のケガなどを介してスポーツ医学の正しい知識の普及をはかるべきと思われる。

第2節 インタビュー調査結果

第1項 スポーツ報道の特徴

スポーツ報道の役割のとしては試合結果、試合や大会に備えた準備や練習、チーム編成や選手の移籍情報、オフシーズンでの生活や身体調整などの報道が挙げられる。特に平日のスポーツの試合は他の業界の活動に比べて夜間に行われることが多い。そのため、新聞など紙媒体では翌朝の発行に間に合わせて印刷するために、記事作成の時間が限られている。保坂³⁹⁾も「新聞やテレビは、原則として、その日あるいは翌日に分析や解説を公表することになるが、紙面のスペースや時間の都合で、深い分析はできていないのが現状だ。」と述べているが、これもスポーツ報道の医学的内容記事にも共通するものと思われる。

第2項 速報性重視

前述のように、試合中のケガなどについての報道については作成する時間が非常に短い。チームの広報からの発表をそのまま報道する事になることも多い。他社の記者と内容を確認し合うのは慣例のようだが、医療専門家はいないため広報の内容確認にとどまる事がほとんどだと思われる。広報から診断名が発表された場合には、一般論として内容を深める事ができる場合もあると考える。また、インターネットメディアは新聞より早く報道するところに存在意義があるため、より早く報道する速報性が重視される。そのため、試合結果をまず素早く報道する事が最優先になるが、利用者もそれを求めていると思われる。

一方、週刊や月刊などの雑誌、メディアは日々のスポーツ報道とは異なる記事作成を行っている。医療、健康問題についてテーマを会議で決め、数週間かけて取材や記事作成ができる。そのため誤りのほとんどない専門的な記事が作成可能であるが、別物であるがゆえに新聞作成の特徴、問題点が浮き彫りになる結果となった。

第3項 記事の推敲

作成された記事は一般的に、記者からデスク、部長、局長などの上層部で確認されてから報道される。しかし、上層部は文章や新聞紙面の割り振りの専門家であり、一般用語の誤字、脱字などは見つけられても、医療用語や医療の内容までは確認できないとのことであった。新聞記者の多くは活字媒体である新聞の正確性に責任と誇りを持っており、誤字や誤記事については仕方がないという気持ちはなく、撲滅したいという気概を感じた。

第4項 記事スペース

紙媒体である新聞では記事記載のスペースが限られている。少ないスペースで楽に記事を書こうというような考えは微塵もなく、多く記事を書きたいという記者魂も感じられた。図なども多く入れて、わかりやすい記事にしたいが、有名選手などでないとスペースがもらえないという回答が多かった。

インターネットメディアではスペースの制約がなく、図だけでなく動画も貼り付けられるため、特に医療専門メディアでは紙雑誌の頃よりはるかに可能性が広がったとのことであった。

一方、長文は読まれにくいとの意見が大半でスペースがいくらでもあれば良いわけではないと言う考えもほぼ共通していた。特にスポーツ報道のインターネットメディア記者は、「ながら読み」されるため、スペースに制限がなくても日々の報道で長文は掲載できず、速報性と無関係な選手の特集記事などにスペースの利点が生かされるとのことであった。

また、図を多く活用できれば良いという意見が多い一方、S2 スポーツ紙記者のように図を掲載しても読者が理解できないという意見もあった。専門的な文章の改善とともに、専門的な解説図もわかりやすく改善する必要があるかもしれない。

第5項 専門家の必要性

医学的内容を相談できる専門家は8名中6名の記者がもっと必要と答えたように、現状では記事作成に協力を仰げる医師等の人脈が乏しかった。何人かの医師のリストが新聞社にもあるようだが、上司からの指示で電話する事はあっても、記者個人が自発的に連絡が取れる医師は充分にいなかった。夜間や休日でも医療業務に従事している可能性がある医師に、記者側の都合で電話する事は躊躇するのは普通かも知れない。そのため、求められる専門家は連絡や相談がしやすい医師であった。大学教授などの権威は必要という意見はなかったが、連絡しやすいという条件からすれば権威はむしろ無い方が良くとも思われる。また、医師との連絡のやりとりで、報酬や完成記事への干渉に関して苦労した経験がある記者もいることから、これらの事情も積極的な連携を持たない一因になっている可能性が考えられた。

Kishi ら²⁴⁾ は医療を題材とした日本の漫画 173 作品のうち医学専門家の校閲を受けているのは 18 作品 (10.4%) であるとし、専門性の軽視により不正確な描写が行われる危険があるとしている。一般社会では、医学書より漫画やスポーツ記事の読者が多いことは容易に想像され、誤った知識の拡散への影響は大きい。そのため、漫画やスポーツ記事において正確な医学的内容を追求することは重要である。漫画もスポーツ報道も趣味や娯楽として軽視すべきでなく、医学専門家の校閲を考慮する必要がある。

第3節 記事検索結果とインタビュー調査結果をふまえての問題点

スポーツ報道における選手の外傷等についての記事では、情報が少なく不明瞭であったり、誤った内容も見られた。記者へのインタビュー結果もふまえて問題が起こる原因について考察した。

第1項 選手、チーム側の事情による問題

選手やチームなど、取材される側の事情による記事作成以前の問題も考えられた。以下の5点に注意して情報を受け取る必要がある。

- ・ケガをした直後の取材時ではまだ明確な診断がついていない。
- ・チームや選手の不利益を避けるため、広報部などがあえて詳細を伝えない。
- ・海外での試合や海外チームに所属する選手の場合は本人への取材が困難だったり情報源が限られたりして情報がはいりにくい。
- ・選手や関係者のケガに対する理解が充分でなく不正確な内容を話す（他チームに混乱を与えたいなど意図的な場合がある）。
- ・診察した医師には守秘義務がある。

第2項 報道機関側の事情による問題

記者など、取材する側に関係する問題点を挙げる。以下の9点の問題を念頭に置き、今後の改善をはかるべきと思われた。

- ・上記のようなチーム、選手側の理由で与えられる情報が少なかったり、誤っていたりする。
- ・選手や関係者の誤った話を検証せずに、そのまま記事にしてしまう。
- ・取材から報道までの時間が少なく、詳細まで調査や取材ができない。
- ・時間に余裕がある場合でも、医療を担当していない記者が独自に専門的記事を書くのは容易ではない。
- ・専門的内容に確信が持てない場合には、誤りを防ぐためにあえて簡略に伝える。
- ・長文は読者に読まれないため、詳細を省略した短い文章にまとめる。
- ・関心の低い選手や試合の場合、記事のスペースが小さく詳しく書けない。

- ・人気の高い選手では記事のスペースが大きく、長文で埋めるために専門的な内容に踏み込んで誤りが増える。
- ・専門用語や一般用語の使い分けに明確な基準がない。

第3項 改善提案

ここまでの状況から考慮すると、時間が充分でない中で連絡や相談しやすい専門家の確保が解決の一助になると思われる。医師との連携では、医師が完成記事についての確認や報酬について拘泥する傾向がある場合に障害になる可能性がある。条件は明確にする必要はあるが、医学専門的なコメントとともに、新聞社側や報道される選手やチームの一般的な事情に精通して適切なコメントが得られる専門家であれば有用と思われる。問題を緩和するためには、専門家が記事作成に積極的に協力できる事を意志表示した部門や個人の活動を進める必要がある。

その部門を報道機関内かスポーツ競技団体内に作るか、医師個人が協力を公言するかなどの方法が考えられるが、その実現手段を考えると以下のような選択肢が考えられる。

- ①新聞社内に医学的内容に対応する体制を作る。あるいは医師の顧問を作る。これが可能になれば、スポーツ部門以外や企画記事など社全体に医学知識の協力が得られる。
- ②競技団体の医科学委員会内にメディアからの問い合わせ対応部門を作る。競技に特化した専門的な情報も得られるほか、団体の広報にも利用できる。
- ③意志のある医師が医療報道の評論家として独立して活動する。これが可能であれば一人の評論家が、多数の報道機関に貢献できる可能性がある。

第4節 本研究の限界と今後の展望

本研究は限られた範囲の調査であり、他の不正確な記事などもみつかる可能性がある。スポーツ外傷や障害に関する報道の調査は研究事例も少ないことから、今後も継続的に取り組む必要がある。

第5章 結論

スポーツ報道としての新聞記事の作成は、試合の結果などが確定してから翌朝の発行に間に合わせるように行われるために、時間に余裕がない。そのため、専門家への取材や相談が十分にできず、医学的内容など専門性を要する内容について不正確になる原因となり得る。

スポーツ選手の外傷・故障に詳しく、かつ連絡や相談が容易な専門家の確保がより良い報道につながると思われる。スポーツ選手の外傷に関する記事作成において、各記者と整形外科医をはじめとする医療者がより積極的に連携を持つことが、正確な報道、さらには国民のスポーツ外傷等に対するリテラシーの向上に貢献すると考える。

謝辞

本研究の遂行におきましては、多くの方々にご指導いただきました。

研究指導員である平田竹男先生には、論文作成のみならず今後の仕事にも通じる奥深い指導と適切な助言を賜りました。また、大学院生活の中でも、調査や研究の面白さを再確認できたことに加え、講義の進め方や会の運営などでも大変勉強になりました。深く感謝いたします。

また、研究の基本的な考え方について御指導いただいた中村好男先生、医療関係の文献を含め、論文作成に具体的な助言をいただいた児玉ゆう子先生、研究の取りかかりやPC操作の基礎などでお世話になった畔蒜洋平先生にも感謝しております。

加えて、インタビューに真摯に御協力いただいた新聞社、出版社などの皆様には、現状を隠すことなく御回答いただいたほか、インタビューや取材の作法について御指導も受けることができ、厚くお礼申し上げます。

最後に、平田研究室の学生修士の皆様には多大な御協力をいただくとともに、社会人修士の同期の皆様方からも多くのことを学ぶことができ感謝に堪えません。ありがとうございました。

参考文献

- 1) 毎日のあゆみ | 毎日新聞社 (mainichi.co.jp)
<https://www.mainichi.co.jp/company/co-history.html> (2022年12月23日閲覧)
- 2) 読売新聞歴史年表 (明治～平成) : 会社案内サイト「読売新聞へようこそ」 (yomiuri.co.jp)
<https://info.yomiuri.co.jp/group/history/nenpyou/index.html> (2022年12月23日閲覧)
- 3) 朝日新聞社小史 | 朝日新聞社の会社案内 (asahi.com)
<https://www.asahi.com/corporate/guide/outline/11215100> (2022年12月23日閲覧)
- 4) 70年のあゆみ - 創刊70周年 : 日刊スポーツ (nikkansports.com)
<https://www.nikkansports.com/70th/history.html> (2022年12月23日閲覧)
- 5) デイリースポーツ (daily.co.jp)
<https://www.daily.co.jp/company/rinen.shtml> (2022年12月23日閲覧)
- 6) スポーツニッポン新聞社 (sponichi.jp)
<https://sponichi.jp/company/history/> (2022年12月23日閲覧)
- 7) 会社案内-創刊150周年 | 報知新聞社 (hochi.co.jp)
<https://www.hochi.co.jp/gaiyo/hochi150th/> (2022年12月23日閲覧)
- 8) サンケイスポーツ - 産経新聞社 (sankei.jp)
<https://www.sankei.jp/media/shimbun/sanspo> (2022年12月23日閲覧)
- 9) 松浪稔、et al. スポーツ史学会第25回大会シンポジウム再録 スポーツメディア史を考える-現代、日本近代、欧米近代の視点から. スポーツ史研究、2013、26: 63-98.
- 10) 紀平梨花公式インスタグラム (@rikaskate0721) から - スポニチ Sponichi Annex 芸能
<https://www.sponichi.co.jp/entertainment/news/2022/08/26/gazo/20220826s00041000473000p.html> (2023年1月8日閲覧)
- 11) 新聞の発行部数と世帯数の推移 | 調査データ | 日本新聞協会 (pressnet.or.jp)
<https://www.pressnet.or.jp/data/circulation/circulation01.php> (2023年1月8日閲覧)
- 12) 令和3年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書
https://www.soumu.go.jp/main_content/000831289.pdf (2023年1月8日閲覧)
- 13) 総務省 | 令和3年版 情報通信白書 | メディアに対する信頼 (soumu.go.jp)
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r03/html/nd125220.html>
(2023年1月8日閲覧)
- 14) 「健康意識に関する調査」の結果を公表 | 報道発表資料 | 厚生労働省 (mhlw.go.jp)

- <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000052548.html> (2023年1月8日閲覧)
- 15) Kishi, Yukiko, et al. "A study of the changes in how medically related events are reported in Japanese newspapers." *Risk Management and Healthcare Policy* 3 (2010) : 33.
- 16) Media Doctor Japan
<http://mediadoctor.jp/> (2023年1月1日閲覧)
- 17) 健康をめぐる状況と意識
<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/14/dl/1-02-1.pdf> (2023年1月8日閲覧)
- 18) 市民のためのがん治療の会 もっと市民のために シリーズ がん医療の今 (com-info.org) http://www.com-info.org/ima/ima_20130313_nagata.html (2023年1月8日閲覧)
- 19) 勝谷紀子; 坂本真士. メディアにおける気分障害の報道 記事データベースによる検討. In: 日本心理学会大会発表論文集 日本心理学会第81回大会. 公益社団法人日本心理学会、2017. p. 2B-020-2B-020.
- 20) 北浩樹、 and 木内喜孝. "メディア上の潰瘍性大腸炎—新聞報道の検証—." 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要= Bulletin of the Institute for Excellence in Higher Education、 Tohoku University 4 (2018): 315-322.
- 21) 北浩樹、 and 木内喜孝. "クローン病の報道-全国3大紙の計量テキスト分析." 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要= BULLETIN OF THE INSTITUTE FOR EXCELLENCE IN HIGHER EDUCATION TOHOKU UNIVERSITY 7 (2021): 387-394.
- 22) 税所玲子、 et al. "「新型コロナウイルス」はどのように伝えられたか 海外の報道をみる (2)." 放送研究と調査 71.3 (2021): 22-39.
- 23) Waszak, Przemyslaw M., Wioleta Kasprzycka-Waszak, and Alicja Kubanek. "The spread of medical fake news in social media—the pilot quantitative study." *Health policy and technology* 7.2 (2018): 115-118.
- 24) Kishi, Yukiko, et al. "Internet-based survey on medical manga in Japan." *Health Communication* 26.7 (2011): 676-678.
- 25) 爲澤健太. "メディアはスポーツ外傷をどのように描いているか?: 特に映画について." 卒業研究抄録集: びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部 2012年度 (2013): 156-156.
- 26) 日刊スポーツ : nikkansports.com
<https://www.nikkansports.com/> (2023年1月10日閲覧)
- 27) スポーツ報知 (hochi.news)
<https://hochi.news/> (2023年1月10日閲覧)
- 28) スポニチ Sponichi Annex
<https://www.sponichi.co.jp/> (2023年1月10日閲覧)

- 29) サンスポ³ (sanspo.com)
<https://www.sanspo.com/> (2023年1月10日閲覧)
- 30) 朝日新聞クロスサーチ(oclc.org)
<https://xsearch-asahi-com.waseda.idm.oclc.org/top/> (2023年1月10日閲覧)
- 31) 毎日新聞社のデータベース「毎索」(oclc.org)
https://dbs-g-search-or-jp.waseda.idm.oclc.org/WMAI/PCU/WMAI_ipcu_menu.html
 (2023年1月10日閲覧)
- 32) ヨミダス歴史館(oclc.org)
<https://database-yomiuri-co-jp.waseda.idm.oclc.org/rekishikan/> (2023年1月10日閲覧)
- 33) 伊藤正男、井村裕夫、高久史磨. 医学用語辞典. 医学書院. 2012.
- 34) 井樋栄二、吉川秀樹、津村弘ほか編. 標準整形外科学 14. 医学書院、2020.
- 35) 新村出編. 広辞苑 7. 岩波書店. 2018.
- 36) 1次L欠場決定のネイマール 腫れ上がった右足首の写真公開 自身のSNSで— スポニチ Sponichi Annex サッカー.
<https://www.sponichi.co.jp/soccer/news/2022/11/28/kiji/20221127s0000200996000c.html> (2023年1月8日閲覧)
- 37) 文化庁 | 国語施策・日本語教育 | 国語施策情報 | 内閣告示・内閣訓令 | 常用漢字表(平成22年内閣告示第2号) (bunka.go.jp)
https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/kanji/
 (2022年12月23日閲覧)
- 38) 田中牧郎、相澤正夫. “難解用語の言語問題への具体的対応: 「外来語」と「病院の言葉」を分かりやすくする提案 (<特集> 日本社会の変容と言語問題).” 社会言語科学 13.1 (2010): 95-108.
- 39) 保坂直紀. 科学ジャーナリズムの研究と教育について思うこと. 科学と社会 2001 ; 総合研究大学院大学共同研究「科学と社会」論文集. 総合研究大学院大学教育研究交流センター、(2002) .249-257.
- 40) 保坂直紀. 新聞における科学記事. 科学における社会リテラシー 1 ; 総合研究大学院大学湘南レクチャー(2003) 講義録. 総合研究大学院大学教育研究交流センター、(2004) . 273 - 294.
- 41) 滝口隆司. 情報爆発時代のスポーツメディア. 創文企画、2018.